

Under takerとProjector アダム・スミスの企業 者観

著者	舩谷 謙二
雑誌名	東北学院大学論集．経済学
号	110
ページ	71-97
発行年	1989-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024491/

Undertaker と Projector

——アダム・スミスの企業者観——

舛 谷 謙 二

目 次

I. 序 論

II. スミスの Undertaker 論

1. 意味の変遷とスミスの位置
2. 「慎重の人」と「商業社会」概念
3. Undertaker の機能とその帰結

III. スミスの Projector 論

1. スミスの法定利子論と Projector
2. ペンサムの『高利擁護論』とその Projector 観
3. Projector と公共社会の利益

IV. 結 語

I. 序 論

アダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) の展開した法定利子承認論がその経済自由主義と整合性を欠くのではないかとする指摘は、スミス存命中既にベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) の『高利擁護論』 (*Defence of Usury*, 1787) によって指摘されたところであったが、デュガルド・スチュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) はその間の事情を次のように伝えている。

「スミス氏がその名を貸して世に公認させてしまった疑念の余地のある諸学説の中で、恐らく、利子率の法的制限という便法に関して氏が抱いた意見はほど多くの重大な帰結を含んでいるものはあるまい。この

Undertaker と Projector

点に関する氏の論考の不得要領さは *Defence of Usury* と題する一小論文においてベンサム氏によって独特な程度の論理的鋭敏さで摘発された。……スミス氏がこの唯一の例においては、あれほど微弱な根拠で、あのような結論を採用したことは、注目に値する一事情である。その結論は氏の政治的論議の一般的精神とあれほど強烈に対照的であったし、また氏が他の機会においては、それらの一切の実践的適用を一貫してあれほど大胆に貫き通した基本的諸原理とあれほど明白に背馳していた¹⁾」。

ベンサムとは異なって、スミスはその概念と機能とを明示こそしなかったものの、企業者²⁾ 範疇を示唆する用語として Undertaker と Projector

- 1) Dugald Stewart, "Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL.D.", reprinted in W. P. D. Wightman, J. C. Bryce and I. S. Ross (eds.), *Essays on Philosophical Subjects*, Oxford, 1980, p. 348. 福謙忠恕訳『アダム・スミスの生涯と著作』, 1984年, 御茶の水書房, 213-14ページ。
- 2) 企業者 (Entrepreneur) 概念がフランスに発達したものであって、その際カンティロン (Richard Cantillon, 1680?-1734) が果たした役割が大きいことを、シュムペーターは次のように指摘している。「フランスの経済学者たちが、イギリスのそれらとは異なって、企業者的役割とその中枢の重要性とを決して見失わなかったのは、彼 (Cantillon—引用者) に基づくところであるともしえよう」(J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954, p. 222. 東畑精一訳『経済分析の歴史』2, 岩波書店, 1956年, 462ページ)。企業者概念の発達がフランスとイギリスで対照的となった原因として、スベングラは両国経済学者の問題意識の相異を指摘している。「企業者の概念と機能とを展開することはミクロ経済関係に関心があつた J. B. セイに残され、主にマクロ経済関係に関心を持っていたスミスのリカード派後継者たちは、そのような企業者の役割を無視し続けたのである」(J. Spengler, "Adam Smith and Society's Decision-makers", in A. S. Skinner and T. Wilson (eds.), *Essays on Adam Smith*, Oxford, 1975, p. 379)。なお、カンティロンにおける企業者概念の意義と限界について岡田氏は次のように述べ、フランス経済学における企業者概念の端緒として位置付けておられる。「自らの不確定な受取分を予期しながらも、一定の支払いを約定して本質的に危険を負担する生産および商業の管理者としては正しく規定されたものではあつたが、その含む領域の外延が不当に拡大されることになって、資本主義的企業者として明確に析出されているとはいえない。」(岡田純一「企業者概念の析出」, 『フランス経済学史研究』所収, 御茶の水書房, 1982年, 21ページ)。

Undertaker と Projector

を用いたように思われるが³⁾、われわれが後に見るように、法定利率が市場利率に比して若干高めの水準に設定されるべきことを結論付けたスミスの論拠の一つは、この Projector と呼ばれる投機的事業者の活動が生産的労働を雇用するための資本を減少させることに対する危惧であった。一方ベンサムは、むしろその Projector に新規事業開拓者としての側面を認めて、その活動を金融上保障するために、その事業の新奇性ゆえに高くならざるをえない利率に法的規制を加えるべきではないことを主張したのであった。この意味において、スミスの法定利率論は、Projector に関する彼独自の認識からの帰結であったように思われる。

以上のような意味からして、本稿はスミスにおける企業者範疇としての Undertaker 及び Projector の概念をスミスに即して考察する。そのために、Ⅱ章では、『道徳情操論』における慎慮の徳との関係を踏まえつつ Undertaker の基本的性格を検討する。それに続くⅢ章では、法定利率論に関するスミスとベンサムの対比の中から Projector の基本的性格を析出し検討することを試みる。

Ⅱ. スミスの Undertaker 論

われわれは本章でスミスにおける Undertaker の基本的性格を考察することを試みるのであるが、それに先立って、ホゼリッツの先駆的研究に依拠しつつ、スミス時代に至るまでの Undertaker の意味の変遷を概観する。次いで2節では Undertaker の性質とその「商業社会」概念との関わりを検討し、最後の節では Undertaker がもつ機能とその意味するところについて若干の検討を行なう。

3) 本稿では以下、『国富論』において同一範疇を示唆するものと見なしうる private adventurers 等も Projector という用語に、また、sober people 等も Undertaker という用語に一括して取扱うものとする。

1. 意味の変遷とスミスの位置

スミスに至る Undertaker なる用語の意味の変遷に関しては、ホゼリッ
ツ (B. F. Hoselitz, 1913-) の先駆的論考がある⁴⁾。先ずわれわれは、彼
の所説を要約することからはじめることとする。

フランス語に語源を持つ Entrepreneur と同義の用語として、イギリス
では主に Undertaker, Adventurer, Projector が使われた。Adventurer
は“Marchant Adventurers”という名で15世紀から使われており、17世紀
にはアイルランドの土地投機家、農業経営者、干拓請負業者などにも使わ
れた。18世紀に入ると危険を承知でチャンスに賭けるといった今日の意味
で使われるようになったという⁵⁾ (Projector に関しては後述)。

一方、Undertaker は頻繁に使用され、その意味も多様に変化している。
その用語は、14, 5世紀には単に「仕事に従事している人」を指している
にすぎなかったが、ほどなく①「政府との契約関係によって課された仕事
を自らの危険を冒して実行する人」という意味を持つに至った。そうなれ
ば干拓事業などを請負うことを通じて、国王（後には議会）から下賜金
(grants)を獲得することになり、それには自ずと利潤目的であることが含
意された⁶⁾。次第に政府との契約関係の強調は薄れ、Undertaker は、②
不確かな利潤がそこから引き出されるかもしれない危険な企て (risky
project) に関与する者を指すようになった。これに付随して、Undertaker
には、炭坑や干拓事業といったかなり大きくて危険を含む事業における企

4) B. F. Hoselitz, “The Early History of Entrepreneurial Theory”, *Explorations in Entrepreneurial History*, III (15 Apr. 1951), reprinted in J. J. Spengler and W. R. Allen (eds.), *Essays in Economic Thought: Aristotle to Marshall*, Chicago, 1960, pp. 234-57. 特に, II. English Concepts Designating Entrepreneurial Activity before Adam Smith, pp. 240-43. 参照。

5) Ibid., p. 240.

6) Ibid., pp. 240-41.

業者との意味合いが含まれた⁷⁾ (次章で述べるように、この意味においては Projector と重複する部分も大きい)。しかしながら、18世紀初頭には古くからの「政府との契約人」という意味合いは消えて、③全く単に大実業家 (a big business man) を、一般的にはしばしば普通の実業家 (an ordinary business man) を指すようになった⁸⁾。それと同時にスミスのころまでに、一般的には④葬儀屋 (an arranger of funerals) という特殊な意味だけが残るような傾向になったという⁹⁾。以上が、ホゼリッツの指摘するところの要約である。

上記④のような意味がなぜ生じたのかは不明であるが、それはスミスと同時代人サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) の *Dictionary* (1756年版) にも第3の意味として登場している¹⁰⁾。

以上概観してきた意味の変遷を順次総括すれば、次のように指摘することができよう。第1に、政府との契約関係 (その意味で一種の独占者の地位でもある) によって下賜金 (Undertaker の側から見れば利潤) を目指して自らの事業に資本を供給する主体としての意味合い。第2に、政府との契約関係を脱却して、より高い利潤を目指して危険を伴う大型事業に乗り出す、危険負担の主体としての意味合い。第3に、危険負担者としての意味合いが薄められ、洗練された「実業家」としての意味合い。そして第4に、葬儀引受人という大きな意味の転換に伴う、一般的な企業者範疇を示唆する用語としての Undertaker の消滅である。

この第3・第4の意味合いがスミスの時代に照応するとすれば、Undertaker の意味がスミス当時、それ以前の意味合いと比較してより洗練され

7) Ibid., pp. 241-42.

8) Ibid., p. 243.

9) Ibid., p. 243.

10) ジョンソンは “undertaker” という項目に次の3種類の意味を付している。“1. One who engages in projects and affairs. /2. One who engages to build for another at a certain price. /3. One who manages funerals.” cf. Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1756), reproduced in the original format by Kenkyusha, 1985.

た実業家の意味を有し (Undertaker がその発生からの有していた資本供給の主体, 危険負担の主体という機能はどうなったのかという点に関しては, 本章の3節に後述する), それが遂には経済学上の用語とは大きく相違する意味を含みはじめていることは注目に値することのように思われる。なぜならば, その意味変化が Undertaker の存在自体の変質を示唆しているのではないかと考えられるからである。

よって, われわれは節を改め, この大きな転換点にあるスミスの Undertaker 論を支える人間観を, 彼の「商業社会」モデルとの関連において少しく検討しようと思う。

2. 「慎慮の人」と「商業社会」概念

スミスが『道徳情操論』の中で間接的ながら Undertaker 的存在の特徴に言及していると思われる箇所として, われわれは先ず次の点を指摘することができよう。すなわち, スミスが施設管理者としての職務は「社会の中流ならびに下層階級 (middle and inferior ranks of life)」の人々に適していると見たこと¹¹⁾。次いで, またそのような人々にあっては, 徳への道 (road to virtue) と富への道 (road to fortune) とが一致する傾向を有するとしたことであって, この点に関してスミスは言う。「すべての中流あるいは下流の職業にあっては, 真摯な健全な職業的才能は, 用意周到な (prudent), 正しい (just), しっかりとした (firm), 節度ある行為 (temperate conduct) と共に, 成功するためにきわめて間違いのない要素である¹²⁾」と。さらに, そのような人々のうち富の追求に熱心な「企業欲の旺盛な人間」(man of enterprise) も「慎慮 (prudence) と正義 (justice)

11) D. D. Raphael and A. L. Macfie (eds.), *The Theory of Moral Sentiments*, Oxford, 1976, p. 56. 米林富男訳『道徳情操論』(上), 未来社, 1969年, 140ページ。本稿では以下, TMS, p. 56. 邦訳 (上), 140ページのように略記する。

12) TMS, p. 63. 邦訳 (上), 151ページ。

の領域さえ超えなければ、常に世間から感嘆される¹³⁾」と見たのである。

このようにスミスは、管理能力が優れた中流・下層階級に属する「企業欲の旺盛な人間」の経済活動も、慎慮と正義の範囲内に存する限り公平な観察者の同感を獲得し是認されうることを示唆したと言える。それでは、このような人々にあって「徳への道」と「富への道」の一致を導く「慎慮」とは如何なる徳性なのであろうか。

スミスは慎慮を「個人の健康・財産・身分ないし名声に対する配慮」と位置付けた上で¹⁴⁾、その具体的表現である儉約・勤勉・分別・注意・配慮という利己的な動機によって養成される習慣が、「あらゆる人間から尊敬と是認を受ける価値のあるきわめて褒賞に価する性質」とであると見る¹⁵⁾。

『国富論』における Undertaker の性質を検討するに際して、次のスミスの記述は注目するに値するように思われる。「安全は慎慮の第一の主要目的である。われわれの健康・財産・身分ないし名声を何らかの危険に曝すことは禁物である。それは企画的というよりもむしろ警戒的であり (It is rather cautious than enterprising), なお一層大きな便益を進んで得させるようにわれわれを鼓舞するというよりも、むしろ既に所有している便益を保持することに一層腐心する。慎慮の美德が主としてわれわれに推薦する財産増殖法は何らの損失とか危険とかをとまなわない方法である¹⁶⁾」。このように、財産の安全性を確保するために危険回避的行動を選択することは、慎慮の必然的帰結として描き出されているのである。スベングレーが指摘した、「環境を作り変えるよりもそれに順応するという、慎重で用心深く、さほどの想像力を持たない人物¹⁷⁾」とも見える Undertaker 観の

13) TMS. p.173. 邦訳(上), 373ページ。

14) TMS. p.213. 邦訳(下), 454ページ。

15) TMS. p.304. 邦訳(下), 634ページ。

16) TMS. p.213. 邦訳(下), 455ページ。

17) J.Spengler, "Adam Smith's Theory of Economic Growth-Part II", *Southern Economic Journal* 26(1), July 1959, pp. 1-12, reprinted in J.C. Wood(ed.), *Adam Smith: Critical Assessments*, Vol. III, Croom Helm, 1983, p.127.

源泉の一つは正にこの点に存するものと思われる。

これを別言すれば、スミスの描く Undertaker は、危険回避に対する配慮の結果として既存の状況を受容するという意味における同質的存在であることを論理的に内包しているとも言えよう。さらに付け加えるとすれば、そのような慎慮が「中流及び下層階級」の人々の主たる徳目であり、そのような人々が上流階級の人々に比して社会において占める割合の高さからすれば、スミスの Undertaker 概念には多数性が含意されていると思われる。慎慮をめぐる記述からこのように Undertaker の性質を捉える時、経済社会に関するスミスの理論的把握に果した Undertaker 概念の役割が明らかになるように思われる。

スミスは、分業の確立が生産物の交換を必要とする結果として「だれでも、交換することによって生活し、いいかえると、ある程度商人になる」商業社会 (commercial society) という概念で、分業の発達に伴う自らの必要を充足させるために恒常的な生産物交換を必要とする交換社会を表現した¹⁸⁾。この社会では誰でもが交換を必要とし「ある程度商人になる」という意味からすれば、Undertaker はこの社会の各成員そのものを指すともいえよう。シュムペーターはスミスの価格論を、「均衡理論の端初的方法」に基づいて「アダム・スミスが作り出した経済理論のなかの全く最上の部分」と表現したが¹⁹⁾、その価格理論における経済主体が「商業社会」というモデルの中で、前述のような多数性と同質性を特徴とする Undertaker から演繹されたものと見れば、小林氏が指摘しておられるよ

18) R.H.Campbell, A.S.Skinner and W.B.Todd(eds.), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford, 1976, p.37. 大河内一男監訳『国富論』, 中央公論社, 1976年, 第I巻, 39ページ。本稿では以下, WN, p.37. 邦訳I, 39ページのように略記する。

19) Schumpeter, op. cit., p.308, p.189. 前掲邦訳2, 646ページ, 同1, 394ページ。なお, スミスの価格論に関しては, 拙稿「アダム・スミスの均衡概念について—『国富論』第1篇第7章を中心として—」, 『東北学院大学論集(経済学)』, 第107号(1988年3月)を参照されたい。

うに、商業社会概念は「経済理論の演繹的展開の扉口にすえられた概念²⁰⁾」であり、その成員たる Undertaker 概念もまた経済理論に対して同様の位置を有しているように思われる。

3. Undertaker の機能とその帰結

われわれは本章第1節で、Undertaker の意味がスミスの時代に大きく変化しているのを見たが、その転換点にあるスミスにおいて、Undertaker の機能はどのようなものとして把握されていたのであろうか。それを検討しようとする時に、次の記述は、その機能を端的に表現しているように思われる。

「資本 (stock) が特定の人々の手に蓄積されるようになるやいなや、かれらのうちのある者は、とうぜんそれを用いて、勤勉な人々を仕事に就かせるであろう。そしてかれらは、その人々に原料と生活資料を供給して、その製品を販売することにより、いいかえると、その人々の労働が原料の価値に付加するものによって、利潤を得ようとする。完成品を、貨幣なり労働なり他の財貨なりと交換する場合には、こうした冒険に自分の資本 (stock) を思いきって投じる (hazards his stock in this adventure) この Undertaker に対して、その利潤として、原料の価格と職人の賃金とを支払うのに足りる以上になにかが与えられなければならない²¹⁾」。

このようにスミスは、(1) Undertaker が自らの資本を用いて生産と販売の主体となること、及び(2) Undertaker が危険負担をしていることに対する報酬として利潤が保証されるべきことを指摘している。この意味からして、われわれが第1節に見たスミス以前の Undertaker の機能であった、利潤を目指して自らの事業に資本を供給する機能及び危険負担機能は、スミスにも一応継承されていると見ることができよう。以下、この2つの機能に

20) 小林昇『増補 国富論体系の成立』、未来社、1977年、61ページ。

21) WN, pp.65-66. 邦訳 I, 82ページ。

について順次検討しようと思う。

スミスの Undertaker が自らの事業に資本を供給する主体であることは明らかであるが、それと同時に、生活資料を必要とする「勤勉な人々」を雇用してその生産物の販売にあたる主体であることも先の引用から明らかである。もしそうだとすれば、そのような存在は資本主義モデルにおける資本家に他ならない。第2節で見たように、「商業社会」は多数の同質的経済主体によって構成されるモデルであったが、Undertaker の機能の内に商業社会モデルとは矛盾するとも見える資本家的機能が内包されていることは注目に値する。すなわち、この矛盾のゆえに「商業社会」概念が「きわめて抽象的な、また技巧的な、それだけに不安定な概念²²⁾」とされるのと同様に、Undertaker の概念もまた不安定な概念となるのである。

Undertaker の第2の機能は危険負担であった。先の引用にとどまらず、スミスは Undertaker の利潤の源泉を危険負担と結びつけているように思われる²³⁾。先ずスミスは、利潤を指揮・監督に対する報酬ではないと明言した上で²⁴⁾、「危険をおかし面倒をいとわないで貨幣を使用する（資本の一引用者）借手にとぜん帰属する²⁵⁾」報酬と位置付け、利潤を「資本の使用にとまらぬ危険と労苦にたいする報償²⁶⁾」と見て、さらに、資本の貸手に支払われる利子率が利潤率から「偶発的な損失を償うにたるもの」を控除した「純利潤」に比例するものであること、すなわち危険プレミアム

22) 小林、前掲書、44ページ。

23) 動態的経済において不可避免的に発生する保険化しえない不確実性 (Uncertainty) と危険 (Risk) とを峻別し、前者を利潤の源泉と見なし、その引受手たる企業者 (Entrepreneur) に利潤を帰属させたナイト (F. H. Knight, 1885-1972) は、スミスを次のように位置付けている。「アダム・スミス及びその直接の追従者たちでさえ、利潤が資本に対する利子とは異なる一要素を含むことを認識していたのである。監督業務に対する報酬は常に区別された。また危険にも言及されたのであるが、資本の損失に関する危険という意味においてであって、そこでは利潤と利子とは必ずしも明別されている訳ではない」(F. H. Knight, *Risk, Uncertainty and Profit*, Chicago, 1921, p. 24)。

24) WN, p. 66. 邦訳 I, 82ページ。

25) WN, pp. 69-70. 邦訳 I, 89ページ。

26) WN, p. 847. 邦訳 III, 257ページ。

が資本の借手たる Undertaker に固有のものであることを示唆している²⁷⁾。このようにスミスは、Undertaker の機能として危険負担を重要な要素と見なしていたように思われる²⁸⁾。

スミスにおける Undertaker を指してスペングラーが「環境を作り変えるよりもそれに順応するという、慎重で用心深く、さほどの想像力を持たない人物」と性格付けたことは先に見たが、このような Undertaker も革新の主体となりうる場合もあることをスミスが次のように示唆していることは注目に値しよう²⁹⁾。「ある大きい事業の企業家 (undertaker) が、ある機械工学上の進歩の結果、かれの古い機械設備をとりはずして、その価格と新しい機械の価格との差額を、かれが職人たちに材料と賃金を供給する基金である流動資本に付け加える³⁰⁾」と。また、「労働者の雇用のために自分の資本 (stock) を用いる人は、製品をできるだけ多量に生産するようなやり方でそれを用いることをかならず望むものである。したがってかれは、自分の職人たちに仕事の最も適当な配分を行い、かれが発明または購入することのできる最良の機械を職人たちに提供しようと努力する³¹⁾」と。このように、スミスは Undertaker も革新の機能を果しうることを示唆しているように思われる。

27) WN, p. 113. 邦訳 I, 161ページ。

28) この点に関して、スキナーは次のように述べている。「利潤について、興味深く注目されることは、スミスはこの収益の形態を<監督および指揮>という経営者の機能の履行に対して支払われる報酬とみなし、むしろ生産諸要素を結合するにあいに費やされる労苦やこうむる危険の補償金とみなしたということである。」(A. S. Skinner, "Introduction to *The Wealth of Nations*", Penguin Books, 1970, p. 61. 川島信義・小柳公洋・関源太郎訳『アダム・スミス社会科学体系序説』, 未来社, 1977年, 135ページ)。

29) スミスは『道徳情操論』で革新 (innovation) という用語を1度使用している。それは政治的な革新に言及しての使用であって、「しばしば危険な革新の精神 often dangerous spirit of innovation」(TMS, p. 232. 邦訳 (下), 491ページ) という否定的意味合いにおける使用といえる。

30) WN, p. 296. 邦訳 I, 453ページ。

31) WN, p. 277. 邦訳 I, 420-21ページ。同様の記述はWN, p. 104. 邦訳 I, 147ページにも見られる。

Undertaker と Projector

先に見たように、商業社会モデルは安定的なモデルではない。それに不安定性を与えたのは、現実社会に対するスミスの認識そのものであったともいえる。すなわち、一つの歴史モデルとしての商業社会も現実の資本主義的経済社会の進展により、その修正を余儀なくされるのである。これを商業社会の経済主体である Undertaker に即して言えばどうなるであろうか。スミスの Undertaker に関する認識は「慎慮の人」から大きく変質させられており、資本供給者としての機能を負わされるのみならず、危険負担や革新といったすぐれて動態的諸事情をも考慮すべき存在として位置付けられたのである。思うに、このような現実としての資本主義経済社会と、その成員に関するスミスの考察は、独立生産者が支配的な経済ではさほど大きな乖離をもたなかった商業社会モデルを、現実とは相当の距離をもつ抽象度の高い歴史モデルとなし、本来その成員を指すべき Undertaker の機能のみならずその用語上の意味さえ大きく変化させたのである³²⁾。

Ⅲ. スミスの Projector 論

われわれは本章で、スミスにおける Projector の位置とその意義についての検討を試みる。そのために第1節では再びホゼリッツの論考に拠りながらスミス以前の用語法を概観し、また『国富論』における法定利子論との関連において Projector の取扱いに関して検討する。それに続く節では、法定利子論をめぐるベンサムの反論を検討しつつ、ベンサムの Projector 観を明らかにする。そして最後の節では、ベンサムの論点をスミスに即して検討し、スミスにおける Projector の機能を若干考察しようと思う。

32) スミス以後の Undertaker が用語上どのように変化したかについて、ホゼリッツは次のように述べている。「英国経済における Undertaker は19世紀末に再び Entrepreneur に道を譲ることになる、資本家 (capitalist) にとってかわられたのである。」(Hoselitz, op. cit., p. 243)。

1. スミスの法定利子論と Projector

Undertaker の用語上の意味が政府との契約関係に基づく請負人から、スミスの直前までには、不確実な利潤を目的とした危険な事業に関与する人々へと変化したことは、われわれが前章で概観した通りである。それでは同じく Entrepreneur の同義語とされた Projector とは、どのような用語的意味として捉えられていたのであろうか。

ホゼリッツによれば、Undertaker と政府との契約関係の強調が薄れ、不確かな利潤がそこから引き出されるかもしれない危険な企て (risky project) に巻き込まれる状況が多くなるにつれて、Undertaker と Projector という用語は競合して使用されるに至った。18世紀における Projector は革新者 (innovator) と見なされていたのであるが、Undertaker と Projector を区別するとすれば、前者は結果の不確実な1つの事業に従事する正直者と考えられ、後者は策士 (schemer)、詐欺師 (cheat) あるいは山師 (speculator) と見なされていたということである。とはいうものの、実際の用例はそれほど隔たったものではなかったという³³⁾。以上約言すれば、スミス以前に流布していた Projector の意味は、①革新者 (innovator) であり、②山師であった。それでは、スミスにおいて Projector はどのように位置付けられていたのであろうか。

われわれがスミスの Projector 観を検討しようとする時、次の記述はその大きな手がかりを与えているように思われる。

「なにか新しい製造業を興したり、なにか新しい商業部門を開設したり、農業上のなにか新規の方法を創設したりするのは、つねに一種の投機であって、Projector はそれから特別な利潤を期待するものである。そうした利潤が、ときには非常に大きいこともあるし、またときには、いやおそらくいっそうしばしば、まったく反対の結果に終ることもある³⁴⁾」。このようにスミスは、産業部門の開設や新生産方式の導入が一種の投機で

33) Hoselitz, op. cit., p. 242.

34) WN, pp. 131-32. 邦訳 I, 191ページ。

あり、Projector はその種の仕事から特別な利潤を期待するが、大きな利潤が得られることもあるものの失敗する場合が多いとして、Projector に対する否定的評価を示唆している。

Projector の投機的行動に対するスミスの否定的記述は、「Projector たちは疑いもなく、この大利潤を黄金の夢のなかにはっきりとみてとったのであろう。しかし、かれらが、その事業企画の終わり近くに、またはこの事業をこれ以上続行できなくなったときに、目がさめてみると、この大利潤を見出す幸運にめぐまれている場合は減多になかった、と私は確信している³⁵⁾」と述べている箇所等に散見され³⁶⁾、それはスミスが Projector に対して何か好ましからざるイメージを持っていると思わせるほどである。とりわけスミスの法定利子論は、Projector に対する彼の見方が経済自由主義に抵触するかに見える重要な結論を導く契機を含むという意味において、注目すべき箇所のように思われる。

スミスは資本蓄積の観点から、不成功に終わるプロジェクトが浪費と同様に生産的労働雇用の為の基金を減少させるとして、次のように指摘する。「不始末というものは、しばしば結果において浪費と同じことになる。農業、鉱業、漁業、商業または製造業における無分別で不成功に終わる事業企画 (project) はすべて、浪費と同じように、生産的労働の維持にあてられる基金を減少させることになる³⁷⁾」と。既述のように、Projector の計

35) WN, p.310. 邦訳 I, 478ページ。

36) 例えば、次の箇所を参照されたい。WN, p.310. 邦訳 I, 480-81ページ、WN, p.312. 邦訳 I, 482ページ等。WN, pp.562-63. 邦訳 II, 298ページでは、費用がかさみ不確実な計画は、それに従事する大部分の人々を破産させるという意味で、富札の値段が極端に高い「この世で一番割の悪い富くじ」と表現している。

37) WN, pp.340-41. 邦訳 I, 533ページ。しかし、むしろスミスが憂慮したのは国家による浪費や不始末なのであって、個人のそれについては楽観的といえる。「もっとも、大国の状態が個人の浪費または不始末によってひどく影響されるということは、減多に起こるものではない。というのは、ある人々の濫費や無思慮は、つねに他の人々の節約や手堅さ (frugality and good conduct of others) によって、十分に償われるものだからである」(WN, p.341. 邦訳 I, 534ページ)。

Undertaker と Projector

画は失敗に終わることが多いにも拘らず、「儲けのチャンスは、だれでも多かれ少なかれ過大評価するものだし、損をするチャンスはたいていのものが過小評価する³⁸⁾」結果として、「ほんのわずかでも成功の見込みがあると、過大な資本が自然とそのほうへ流れ込んでしまう³⁹⁾」。そこでスミスは、利子率の規制によって Projector への資本流出を阻止しようとするのである。スミスは言う。

「…法定利子率は、最低の市場利子率をいくらか上回るべきであるにしても、それを大きく上回るべきではない…。たとえば、大ブリテンの法定利子率が、8ないし10パーセントというように高く定められたならば、貸し付けられるはずであった貨幣の大部分は、浪費家や投機的企業家 (prodigals and projectors) に貸し付けられてしまうだろう。というのは、こうした高い利子をよろこんで支払うのはかれらだけだからである。……このようにして、この国の資本の大部分は、……それを浪費し破壊する見込みの最も多い人たちの手中に投げ込まれるであらう。これと反対に、法定利子率が最低の市場利子率をほんの少しだけ上回って定められているところでは、……国の資本の大部分は、それを有利に使用する見込みが最も多い人の手に流れ込む⁴⁰⁾」。

この法定利子論には、資本破壊者としての Projector 観が鮮明に表現されているのである。

浪費家と Projector とを同一視して、それが本来労働者を雇用する筈の資本を減少させると批判するスミスに対し、一書を以て反論を試みたのが同時代人ジェレミー・ベンサムである。そこでわれわれは節を改めて、ベンサムの所説を検討しようと思う。

38) WN, pp.124-25. 邦訳Ⅰ, 178ページ。

39) WN, pp.562-63. 邦訳Ⅱ, 298ページ。

40) WN, p.357. 邦訳Ⅰ, 559-60ページ。

2. ベンサムの『高利擁護論』とその Projector 観

『高利擁護論』は、ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) が旅行先である白ロシアのクリコフ (Crichoff) 滞在中、1787年1月から同年3月にかけて一友人に書送った12通の書簡と、スミス宛の書簡 (同年3月付) の合計13通からなる書簡集である。その内容は、「金銭取引の条件に対して現在為されている法律上の諸制限が不当な措置であることを一友人への一連の書簡の形で示し、併せて上記制限がもたらす発明的産業の進展を抑制する諸障害に関して法学博士アダム・スミス殿宛に認められた一書簡をこれに添付する」という副題が的確に示している⁴¹⁾。われわれは、ベンサムの諸説を第13書簡 (スミス宛の書簡) に即して以下概観する。

ベンサムは先ず「全て貴方に負うています」(I owed you everything)と述べて、スミスからの学恩の大きいことを讃えつつ、スミス自身が教え語った知的武器によってその誤謬や見落しを指摘するに至る経緯を述べることから始めている⁴²⁾。次いで、論考の目的が Projector の擁護 (すなわち利子規制を撤廃すべきこと) にあることを明らかにして、次のように述べている。

「私が敢えて申し上げようとするのは、私見によれば無害 (innocent) であるどころか最も功績ある (meritorious) 人々でありながら、

41) "Defence of Usury; Shewing the Impolicy of the Present Legal Restraints on the Terms of Pecuniary Bargains in a Series of Letters to a Friend to which is added a Letter to Adam Smith, Esq. LL. D. On the Discouragements opposed by the above Restraints to the Progress of Inventive Industry", 1787. in J. Bowring (ed.), *The Works of Jeremy Bentham*, vol. 3, Russell and Russell, 1962, pp. 1-29. なお、ベンサムが『高利擁護論』を執筆するにいたる経緯に関しては、E.C. Mossner and I.S. Ross, "Jeremy Bentham's Letter to Adam Smith (1787, 1790)", in *The Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1977, pp. 386-87. 及び J. Rae, *Life of Adam Smith*, Macmillan, 1895, pp. 423-24. 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』, 岩波書店, 1972年, 528-30ページ参照。

42) Bentham, op. cit., p. 20.

不幸にして貴下の不興を買った人々の弁護をするためです。それは Projector たちのことでありますが、貴下はその不快な名称の下に、富の追求において何かしら新しい方面 (any new channel) 殊に発明 (invention) の方面に乗り出すような人間すべてを一括しておられるように思われます⁴³⁾」。

ベンサムは反論は先ず、スミスが Projector と浪費家とを同列に扱った点に向けられる。概要は次のようなものである。ベンサムによれば、スミスが「浪費家と Projectors」というように、浪費家と Projector とを並称することに先ず問題があって、それは浪費家という邪悪な名称のもつ好ましくない響きが無差別に Projector にまで適用されるからである。すなわちそれは、言わば人が「音響の暴逆による虜」(captive by tyranny of sounds) となることによって、問題が少なくとも最初の瞬間には既に決したものと見えてしまうのである。ゆえに、その「虜」となった人々に対して「Projector を規制するべきか否か問うことは、無分別 (rashness)・愚行 (folly)・不合理 (absurdity)・不正行為 (knavery) 及び浪費 (waste) を規制すべきか否か問うているのと同じなのだ⁴⁴⁾」と。このようにベンサムは、Projector に関するスミスの用語法を「音響による暴逆」と喝破し、その不当性を説くことから論を始めている。

次いで、ベンサムは自らの Projector 観を提示する。彼の見る Projector とは「富あるいはその他の如何なる目的の追求においても、富の助けによって何らかの発明分野に辿りつこうと努力する全ての人々」であり、「如何なる目的を追求しているにせよ、その過程において改良と呼びうるものを目標とする全ての人々」を指しており、人々の使用に供するために何か新しいものを生産したり、品質向上、費用節約といった改良を行なう有用な存在なのである⁴⁵⁾。その意味からして、それが有用な存在であるにも拘

43) Ibid., p. 21.

44) Ibid., p. 21.

45) Ibid., pp. 21-22.

らず高利禁止法は「創意がその補助手段として富を必要とする人間諸力のあらゆる行使に襲いかかってくる⁴⁶⁾」と、ベンサムには見えるのである。

さらにベンサムは、「浪費家と Projector はどんな高利でも平気で払う」というスミスの立言に対して、そうならざるをえない状況を次のように説明する。すなわち、確かに Projector は高利を支払っているが、それは無分別な (imprudent) Projector のみならず、言わば「思慮深く充分な基盤を持った」(prudent and well-grounded) Projector も支払っているのであって、その意味からすれば、Projector はそれが思慮深い (prudent) か否かに係わりなく、その目新しさ (novelty) ゆえに高利を余儀なくされる状況に置かれるのだと。現実の低い利率は、安全性の保障された古くから営まれている事業向けに設定されているのであって、新しい方面での事業はそれと同一の安全性を保障しえないことから、低利の状況では、目新しい事業だというだけで実行の機会さえ奪われるのだと⁴⁷⁾。通常の分別を持つ人間ならば、良質のプロジェクトか否かは弁別しうるものであって、旧来の事業に有利な法律では、良質のプロジェクトまで金融上の理由から実行の道を断たれてしまうという状況に、ベンサムは次のように反問する。「今日どんな日常業務 (routine) とされているものでも、その始まりはプロジェクトではなかったのか。今や確立されたもの (establishment) であろうとも、かつては革新的な事柄 (innovation) ではなかったのか⁴⁸⁾」と。そしてベンサムは、人類の経済的發展を将来にわたって一層増大させるために、Projector の活動を抑制する高利禁止法は撤廃されるべきと結論づけるのである⁴⁹⁾。

ベンサムは上述の Projector 観と高利禁止反対論に続けて、後半部分で大きくは次の2つの論点を取上げている。第1は、スミスの法定利率論とその経済自由主義との整合性の問題であり、第2には、スミスが何故に山師的な Projector 観を持つに至ったかの問題である。第1の問題に関して、

46) Ibid., pp. 21-22.

47) Ibid., p. 22.

48) Ibid., p. 22.

49) Ibid., p. 23.

ベンサムはスミスの原理の認識として、①人類が繁栄に向う傾向を有すること、②少なくとも個人の行為の総体においては分別 (prudence) が無分別に勝ること、及び③自らの金銭上の事柄は政府ではなく個人自身が管理するのが最適であることを挙げ⁵⁰⁾、他ならぬこのスミス自身の観点から『国富論』の章句を織りまぜて、法定利子論がスミス自身の経済自由の原理に反するものであることを指摘している。さらに第2の問題、すなわちスミスが山師的 Projector 観を持つに至ったと思われる原因としてベンサムは、(1)高利で金を貸すことがけしからんことであり、また高利で金を貸す者が邪悪な人間であるとする世評、それに関連して、Projector が愚かで卑しむべき人間か、はたまた、ならず者で破壊的な人間という風評に惑わされたのではないか、(2)たまたま観察の対象となった Projector がそのような偏見を抱かせるような人物であったために世評を追認する結果となったのではないかと推測しているのである⁵¹⁾。

以上われわれはベンサムの所説を概観してきたのであるが、それをベンサムに即して約言すれば、3つの論点を指摘することができよう。第1に、Projector とは発明や改良を為す社会的に有用な人々であるが、スミスはそれを評価しなかった。第2に、法定利子論はスミスの自由経済の原則に対する侵害であり両者は整合性を欠いている。そして第3に、スミスがそのような Projector 観（及び法定利子論）を持ったのは世評に惑わされたか、観察の対象が不適切であったのではなかったか。われわれは第1の論点を中心に、節を改めて検討しようと思う。

ところで、この『高利擁護論』に対してスミスはどのような反応を示したのであろうか。その手がかりとして、ベンサムの弁護士仲間ジョージ・ウィルソン (George Wilson) が法廷弁護士兼下院議員ウィリアム・アダム (William Adam, 1751-1839) から聞いた話としてベンサムに書き送った、次のような書簡が存在している。

50) Ibid., p. 23.

51) Ibid., p. 28.

「アダム・スミス博士が当地選出の下院議員ウィリアム・アダム氏に話された内容をまだお話ししてはいませんでしたでしょうか。博士の御発言は次のようなものでした。『高利擁護論』は大変に優れた人の作品であり、自分は大きな衝撃を受けたが、(議論の)やり方が立派だったので不平を言うことはできないと、そして貴君が正しいということとを認めたようでした⁵²⁾」。

この点に関してジョン・レーは、「スミスがもっと長生きをして自著の新版を出したならば、利子率にかんする彼の立場を修正したであろうことは当然考えられる⁵³⁾」と述べてはいるものの、それがスミスによる直接的な言及ではないことからすれば、推測の域を出るものではない。

ウィルソンからの手紙を受取ってから約1年半後の1790年7月初旬、『高利擁護論』第2版の発行に際して、ベンサムは直接スミス宛に書簡を送っている。その内容は(1)自分の『高利擁護論』と大方同意見だという話を耳にしているが、直接的に表明して貰えば幸いであるということ、(2)トーマス・リード(Thomas Reid, 1710-96)博士から同主題の論文を贈られたが自分と同意見であるとのことであったので、再版にあたりそれを収録するつもりであること、そして(3)コンドルセ(Marquis de Condorcet, 1743-94)による同様の主題に関するチュルゴー(A. R. J. Turgot, 1727-1781)の記述も同意見であることから、訳文のみならず原文をも補論として収録するつもりであること等である⁵⁴⁾。スミスの死期(1790年7月17日)から

52) "Letter from George Wilson, dated 4 December 1788", in A. T. Milne(ed.), *The Correspondence of Jeremy Bentham*, vol. 4, Athlone Press, 1981, pp. 19-20.

なお、ジョン・レーはこの手紙を大英博物館収蔵の未整理のままの手稿から引用したものか、1年違いの1789年12月4日付けとしている。Rea, op. cit., pp. 423-24. 前掲邦訳, 530ページ。また、レーの『伝記』から引用しているスミス書簡集も同様の日付を採用している。*The Correspondence of Adam Smith*, Appendix C, p. 387.

53) Rae, op. cit., pp. 423-24. 前掲邦訳, 530ページ。

54) "Letter to Adam Smith, dated Early July 1790", in A. T. Milne(ed.), op. cit., pp. 132-34.

して、『ベンサム書簡集』の編者は肯定的な見解をとってはいるものの⁵⁵⁾、このベンサムの書簡がスミスの目に触れたかどうかは不明のままである。

3. Projector と公共社会の利益

われわれは前節で『高利擁護論』を概観したのであるが、本節ではそこで指摘されたベンサムの論点のうち第1のもの、すなわち、スミスは Projector の否定的側面のみ強調してその革新者としての機能を把握しなかったという論点に関して、スミスに即して若干の検討を試みることにする⁵⁶⁾。

スミスは不始末による資本破壊という観点から Projector を非難するのであるが、勿論のこと Projector の活動が全て不成功に終わるとは見ている訳ではない。すなわち、大部分の企業は破産を避けようと十分に注意を払う結果、「不始末についてみれば、思慮ぶかく成功した企業の数、どこでも、無分別で不成功に終わる企業の数よりもずっと多い」と述べ、企業活動を総体として見る場合、個別的企業の不始末が資本を破壊し尽す可

55) 「アダム・スミスは1790年7月17日の死の直前に、ベンサムからこの種の書簡を明らかに受取ったことであろう」(Milne, op. cit., p.132)。

56) 前節に見た第2の論点(利子率を規制することと自由経済の原則との整合性)については、次のように見るができるように思われる。スミスは経済自由主義の原理を基礎としたが、その際の限定条件とも言うべき内容を、銀行業規制の必要性を説く箇所ですべて述べている。この限定条件は彼の法定利子率容認の論拠とも考えられよう。「少数の人の自然的自由(natural liberty)の行使は、もし、それが全社会の安全をおびやかすおそれがあるなら、最も自由な政府であっても、最も専制的な政府の場合と同じように、政府の法律によって抑制されるし、また、抑制されるべきものである。火災が広がるのを防ぐために隔壁を作るのを義務づけることも一つの自然的自由の侵害であって、それはここで提案されている銀行業の規制とまさしく同じ種類の侵害なのである」(WN, p. 324. 邦訳 I, 505ページ)。どちらかといえば形式論的に利子規制と経済自由の原理とを対置させてその整合性を問うベンサムとは異なり、スミスの思考は伸縮的かつ重層的といえる。すなわち法定利子論は、ヴァイナーが指摘する通り、スミスが「広く且つ弾力的な範囲に及ぶ政府活動を見ていた」(J. Viner, "Adam Smith and Laissez Faire", in J. M. Clark, P. H. Douglas et. al., *Adam Smith, 1776-1926: Lectures to Commemorate the Sesquicentennial of the Publication The Wealth of Nations*, 1928, p. 154) ことの、ひとつの証左でもあったように思われる。

能性を否定している⁵⁷⁾。むしろ、「大国が、私的な浪費や不始末によって貧乏になるようなことは決してないが、公的な浪費や不始末によってそうなることはときどきある」として、政府の不始末こそ警戒すべきことを指摘しているのである⁵⁸⁾。

ところで、スミスが Projector の中に市場における競争促進機能を見出していることは、それへの積極的評価を為しているという意味において注目し得るもののように思われる。スミスは、利潤を目指す商人たちの行動が(1)市場拡大と(2)競争制限を引起し、前者は公共社会の利益に一致するものの後者は常に反することを指摘したが⁵⁹⁾、Projector と同様の範疇に属するものと見られる「山師的な投機的商人」に、その競争制限を打破する機能があることを認めて次のように述べている。

「どんな商売であれ、土台のしっかりした正規の業者は、たとえ同業組合に組織されていなくても、おのずから手を結んで利潤を引き上げようとする。この利潤を、いつでも妥当な水準に引き下げておけそうなものといつては、山師的な投機的商人 (speculative adventurers) の機に応じた競争に勝るものはまずほかにない⁶⁰⁾」。

このようにスミスは、Projector の行動の中に公共社会の利益を常に促進する競争促進機能を指摘したのであるが、それでは、前述の(1)市場拡大に対して Projector は如何なる関係にあるのであろうか。これを別言すれば、それはスミスが Projector のもつ革新者としての機能を把握しなかったのではないかとするベンサム論点でもある。

スミスは経済における革新の働きを必ずしも見逃した訳ではないように思われる。「投機的な商人は、正規の、基礎の確立した世間周知の事業部

57) WN, p. 342. 邦訳Ⅰ, 535ページ。

58) これに続けてスミスは、節約や手堅さが私的な不始末のみならず公的なそれをも償うものとして、「自分の暮らしの改善を目指しての」努力こそが富裕の根源であることを指摘する。WN, pp. 342-43. 邦訳Ⅰ, 535-36ページ。

59) WN, p. 267. 邦訳Ⅰ, 406ページ。

60) WN. p. 736. 邦訳Ⅲ, 75-76ページ。

門では、仕事をしない⁶¹⁾」と述べ、また先に引用したように、産業部門の開設や新生産方式の導入が一種の投機であって、Projector はそこで特別な利潤を目指して活動するとされていることからすれば、形式的には、Projector は産業部門創設や新生産方法導入といった、革新の主体といえよう。内容的に見ても、経済上の変化が言わば Undertaker の小規模かつ漸進的改善の総体によってもたらされると見たスミスは⁶²⁾、飛躍的發展を意味する技術革新に関して積極的な言及を行なわなかったのではあるが⁶³⁾、そのことから直ちに、スミスが技術革新を無視したと結論付けることはできないように思われる。

スミスが『国富論』を執筆したのは大規模な技術革新の時代であった。ジョン・レーによれば、蒸気機関の発明者ワット (James Watt, 1736-1849) がグラスゴー大学の職人となるにあたってはスミスも協力し、ワットの仕事場へ好んで出入りしたという⁶⁴⁾。このような歴史的事実を別

61) WN, pp.130-31. 邦訳 I, 189-90ページ。

62) スミスがこのように見たのは、慎慮の徳を身に付けた同質で多数の Undertaker 間の競争が社会の富裕をもたらすとする認識からであったように思われる。しかし、慎慮がその保守的性質のゆえに革新に対して抑制的に作用するとすれば、スミスが技術革新にさほどの力点を置かなかったとも見える理由の一端は、そこに存するように思われる。

63) その理由を、スペングラーは次のように見ている。すなわち、技術革新は固定資本に具現化される傾向があるが、スミスが主に流動資本に関心を集中させ、「相対的に固定資本を無視した」結果、生産力の発達における技術革新の効果を過小評価したと。cf. Spengler, "Adam Smith's Theory of Economic Growth", p.127.

それに対してブラウンは次のように述べて、スミスにおける技術革新が人的資本に体化されているとする視点を提示している。「彼はしばしばその話題(技術革新のこと—引用者)に言及している。彼がしなかったことは、それを明示的に固定資本形成に関連付けることであった。……スミスの分業モデルの観点からすれば、技術革新は資本に体化されているのではなく、生産要素である労働に体化されているのである。技術革新とは、人間の知識が作り出した機械の働き (function) に存するのではなく、人間の知恵の働きに存する」(M. Brown, *Adam Smith's Economics: Its Place in the Development of Economic Thought*, Croom Helm, 1988, p.166)。

64) Rae, op. cit., p.90. 前掲邦訳, 90ページ。

としても、スミスは政府の干渉が必要な事例として、機械の発明に対する特許権を認めて、発明の持つ意義に配慮しているように思われる⁶⁵⁾。何よりも、スミスの経済体系の中で機械の発明は重要な機能を果たしているように思われる。すなわち、『国富論』第1篇の最初の3章は分業に関するモデルの提示であって、スミスは、分業の増進が①労働者の技能を増進し、②仕事間の移動に要する時間を節約し、③機械の発明を促して生産力を増進させ、市場を拡大し、さらに分業を増進させるという因果関係を示したのである。その観点からすれば、機械の発明は分業とは相互作用的であり、それは同時に市場拡大とも相互作用的であるという意味において、重要な要因として機能しているといえる。

ところで、Projector 観に関するスミスとベンサムとの差異は、どこから生じたのであろうか。スミスの Projector 観が世評による眩惑と観察の不適切さの帰結であるとベンサムが見たことは、前節に見た通りである。一方、ベンサムの所説に対するスミスの言及が僅かばかりの間接的なものであることからすれば、その対照的とも見える両者の差異をもたらしたものを確定することは極めて困難であって、推測の域を出るものではない。敢えて言えば、その差異をもたらした原因を、スミスとベンサムとの世代差の内に求めることは可能ではなかろうか。

上田辰之助博士はスミス当時の社会的風潮にその原因の一端を見出し、「アダム・スミスが生まれたのは1723年であって、南海バブルの大恐慌を去ることわずかに3年足らず、それは俗に『投機的事業の時代』と呼ばれるほど乱暴で奇抜な事業計画が盛んに世人を惑わせた時代であった。……こういう世の中の風潮がスミスをプロジェクトター嫌いにするのに全く無関係であったとは考えられない」と指摘された⁶⁶⁾。また、産業革命が1760

65) 「この種の一時的な独占権は、新しい機械のそれとよく似た独占権が、その発明者に授けられ、新しい書物のそれが著者に授けられるのと同じ考えから弁護することができよう」(WN, p. 754. 邦訳Ⅲ, 104ページ)。

66) 上田辰之助「アダム・スミスと投機的事業家」、『一橋論叢』第32巻第4号、1954年、11ページ。

年代に始まったと見れば、その時スミスは40歳前後であって、技術革新の主体というよりも寧ろ前世紀以来の「世人を惑わす」という Projector 観が強く働いたとも考えられよう。一方、ベンサムは生年は1748年であることからして、スミスとは逆に、みずみずしい精神の眼前に展開される技術革新の偉大な効果に影響されたことは十分に考えられる。すなわち、スミスとベンサムとの25年という約1世代の年齢差が、そしてまた、産業革命という経済社会の急激な変貌期が双方どの年齢に対応しているかということが、両者の Projector 観の相違となって現われているようにも思われる。

ケインズ (J.M.Keynes, 1883-1946) は法定利子論に関する両者の違いを Projector 観の相違と見て、「われわれはベンサムの中に、18世紀に向って語られている19世紀イギリスの声を聞いているのであろうか」と述べたのであったが⁶⁷⁾、ケインズはスミスの高利禁止論を、法的に禁止しなければならないほど或いは禁止できるほどに高利であっても借手が多数存在することの帰結であるとする観点から、「投資誘因の黄金時代」の産物と見たのである。一方、ベンサムの高利擁護論 (利子規制反対論) の中に、「投資誘因が欠乏することの理論的可能性」を読み込んだのであった。

Ⅳ. 結 語

本稿の志したところは、スミスにおける企業者範疇としての Undertaker 及び Projector の位置と機能とをスミスに即して検討することであった。

われわれは先ず第Ⅱ章において、スミスの Undertaker 論を概観した。そこでの内容を約言すれば次のようにならう。用語の変遷史からすると、Undertaker は独占者の意味合いが薄れ通常の利潤を目当てとして生産活

67) J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan, 1936, pp. 352-53. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』, 東洋経済新報社, 1983年, 352-53ページ。

Undertaker と Projector

動に従事する実業家としての側面が強調されるに至る。しかしその用語自体が既に an arranger of funerals という特定の意味を指すように変化しつつあることに象徴されるように、その概念自体不安定である。それは、その構成要員をなす多数の同質的経済主体を Undertaker として位置付けた「全ての人がある程度商人になる」スミスの商業社会概念自体がもつ不安定性と軌を一にするものである。スミスは市場経済における危険負担や、部分的にしる技術革新といった経済の動態的性格の存在をも視野に入れたのである。その意味からして、Undertaker は、スミスをして商業社会モデル内で展開される経済現象の理論的把握を可能にしたと同時に、現実の経済社会が資本主義社会へと進展するとともに消滅する過渡的な概念であった。

それに続く第三章は、スミスとベンサムの対照的とも見える Projector 観をめぐっての議論であった。スミスは生産的労働を雇用する筈の資本を破壊する者として Projector を取り上げ、そのような Projector に資本が流出することを抑制する観点から法定利子論を提示したのである。それとは異なる Projector 観を提示したベンサムは、革新者として経済社会発展の原動力となる有用な存在と位置付けた上で、有用な人々への資本移動を法定利子によって規制することは経済自由の原則にも反すると指摘した。われわれの検討によれば、スミスは Projector が市場における競争を活性化して公共社会の利益に資する積極的側面にも気付いており、また、発明のもつ経済的意味の重要性を見逃すことなく分業モデルに組込んだのである。スミスとベンサムの差異は、思うに、その年齢差から発する産業革命に対する認識の相違に起因するものであった。この意味からして、スミスの Projector 概念もまた、「投機の時代」と産業革命期との間に存する、すぐれて過渡的な概念であったと言えよう⁶⁸⁾。

68) スミスの Projector 概念のその後の発展に関しては、異なる見解が並存しているように思われる。例えば、シロス＝ラビーニは「シュムペーターの革新者 (innovator) はスミスの Projector に他ならない」と述べて、両者のノ

Undertaker と Projector

スミスが何よりも重視したのは、資本と計画との釣合であった。すなわち、Projector はその釣合を欠く結果として「その雇用方法が無分別⁶⁹⁾」として否定的文脈において取扱われたのであり、一方、「真面目なひとびと」も資金以上の取引によってその釣合を欠けば、所得と支出の釣合を欠く浪費家に同様と見なされたのである⁷⁰⁾。スミスはこの釣合の内に Undertaker と Projector とを位置付けたように思われる。

(1988年12月20日提出)

継承関係を強調する。cf. P. Sylos-Labini, "Competition: The Product Markets", in T. Wilson and A. S. Skinner (eds.), *The Market and the State*, Oxford, 1976, p. 219. それに対してスペングラーは、スミスの企業者概念自体は明確ではないものの、それは1760年代半ばまでの英国経済状況に負うていることからすれば、シュムペーターのそれに先鞭を付けたとは言えないことを指摘している。cf. J. Spengler, "Adam Smith and Society's Decision-makers", p. 411. われわれが見てきたように、スミスの Projector は歴史性の強い概念であることからすれば、シュムペーターへの、また、シュムペーターのみへの継承関係の強調には、若干無理があるようにも思われる。

69) WN, pp. 340-41. 邦訳 I, 533-34ページ。

70) WN, pp. 437-38. 邦訳 II, 92ページ。